

「音楽科教育演習」におけるルーブリックを活用した アクティブ・ラーニングの取組み

A study of active learning in the music education seminar utilizing rubrics

三宅 康一・中桐 實
Koichi MIYAKE・Minoru NAKAGIRI

要旨

数年前から教育現場において、従来のような知識の伝達やその注入を中心とした授業から、教師と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に課題を発見し見出していく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要であると言われるようになった。

本稿では「音楽教育演習」の授業で行っている「ルーブリックを活用したアクティブ・ラーニングの取組み」の実例を示しながら考察を加え、「音楽教育演習」の目標とする「より高い指導力と主体性を兼ね備えた教師の育成」のシステム構築を考える。

Abstract

It has been said in the educational field for the past several years that a new method of teaching, so-called 'active learning', needs to be urgently adopted in the classroom. The conventional teaching style of conveying information and knowledge to students unilaterally should be abolished and, instead, it is now encouraged that students and teachers communicate closely, inspire each other, and work hard together to mutually improve themselves. In order to do so, schools should create secure environments that encourage active learning and allow students to mature through education.

By exemplifying 'active learning' teaching methods, and utilizing the rubrics conducted in this seminar, we will build new systems that nurture music teachers with excellent teaching skills, high-level leadership, and the ability to use their initiative in the classroom. This is the goal of this music education seminar.

【1】はじめに「アクティブ・ラーニングの意義」

生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力を持った人材は、学生からみて受動的な教育の場では育成することができない。従来のような知識の伝達や注入を中心とした授業から、教師と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に課題を発見し解を見いだしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要である。すなわち個々の学生の認知的、倫理的、社会的機能を引き出し、それを鍛えるディスカッションやディベートといった双方向の講義、演習、実験、実習や実技等を中心とした授業への転換によって、学生の主体的な学修を促す質の高い学士課程教育を進めることが求められる。学生は主体的な学習の体験を重ねてこそ、生涯学び続ける力を習得できるのである。

*「質的転換答申」4. 求められる学士課程教育の質的転換より抜粋

【2】アクティブ・ラーニングが目指すもの

上記「アクティブ・ラーニングの意義」から、学生たちにどのような力の育成が必要なのかを考える。

- ①グローバル化した変化の激しい社会では、学校で習った知識だけでは不十分であるため、自ら知識を獲得し、生涯にわたって学び続ける力を育成する。
- ②修得した知識を活用し、他者と協力しながら問題を発見し、課題を解決する力を育成する。
- ③自己管理ができ、他者と良好な関係を築き、課題を解決できるジェネリックスキルを育成する。
- ④自ら価値観を形成し、将来を見通しながら生きていくための主体性を形成する。

【3】アクティブ・ラーニングとは

- ・アクティブ・ラーニングとは、一方的な知識伝達型の講義を聴くという（受動的）学習を乗り越える意味での、様々な形態で行われる能動的な学習のことである。そして、その能動的な学習には、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う。
- ・アクティブ・ラーニングでは、書く・話す・発表するという外的活動の能動性を通して、深く学ぶという内的能動性の育成を目指す。
- ・アクティブ・ラーニングでは、他者につながりながら自らの学びを開き、自己の将来への見通しを持ち、自己と他者、自己と世界との関わりを探究するという「学びの社会性」の獲得を目指すとともに、社会のなかで「より良く生きていく」ために自らの「成長」を促すことを目指している。

【4】アクティブ・ラーニング型授業の目的

- ・アクティブ・ラーニング型授業の目的は、昨今のグローバル化した知識基盤社会の中で、様々な変化にフレキシブルに適応しながら力強く生きていくアクティブラーナーを育成することである。
- ＊アクティブラーナー…一人ひとりが自立した人格を持ち、自ら能動的に学び続け、知識を活用しながら状況に応じて的確な判断ができ、自ら発見した問題、あるいは社会的な課題を、他者と協力しながら解決できる人材。

【5】アクティブ・ラーニングの評価の枠組み

1. アクティブ・ラーニングの評価

評価については《何を／誰が／いつ／どのように評価するのか》を考える必要がある。

（1）何を（評価対象）

「学びの積み重ねによって形成される能力」をアクティブ・ラーニングと考えれば、対象世界との関係、他者との関係、自己との関係という3つの軸によって描き出された能力を評価することになる。しかし、これら全ての能力が評価対象になるわけではないし、全てが同じ方法で評価されるべきではない。アクティブ・ラーニングにおける評価では、目標と評価の間に客観的な整合性が求められる。

（2）誰が（評価主体）

アクティブ・ラーニングの評価では、教員だけでなく学生も評価主体となる。なかでも重要なことは学生自身が「自分の学習についての自己評価や相互評価」というかたちで参加することであり、また、ある時は「自分たちの受けている教育の評価（授業評価、カリキュラム評価、学校評価）に、評価主体として参加する」ことである。

しかし、評価者間の評価結果がいつも一致するとは限らない。そのような場合、そのズレが

どうして生じたかを考えさせることも学習を一層深めるきっかけとなる。

(3) いつ（評価時期）

- ①診断的評価…教育期間の初めに、学習者の状態を確認するための評価
- ②形成的評価…教育期間の途中で、目標にどの程度近づいているかの確認評価
- ③総括的評価…教育期間の終わりに、目標が達成されたかどうかを見るための評価

(4) どのように（評価方法）

・パフォーマンス評価

書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴うパフォーマンスを評価する。（アクティブ・ラーニングでは、評価の素材が学習の中で絶えず生み出されていると考える。）

・ポートフォリオ評価

ポートフォリオに収められた学習の証拠となる資料に基づいて、学習者の成長のプロセスを評価する「学習者が何を自分の学習の証拠」と見なすかが課題となる。

・ルーブリック

学習者のパフォーマンスの質を評価するために用いられる評価基準と考える。能力というのは、初歩的な課題を処理できる能力から複合的な課題に対処できる高度な能力まで、大きな幅を持った連続体である。それを評価するには、連続体のどこに質的な差異を見出すかという判断が求められる。ルーブリックはこの判断を明示し、共有するための優れたツールであると考えられる。

2. 目的・対象・評価者・時期・方法についてまとめると、以下の表1のようになる。

表1 評価の原則

評価の観点	具体例
1. 何のために（目的）	1-a：形成的評価 1-b：総括的評価
2. 何を（対象）	【学習者】 2-a：知識・技能 2-b：思考力・判断力・表現力
	2-c：主体性・多様性・協働性
	【プログラム】 2-x：目標・目的 2-y：授業手法 2-z：評価
3. 誰が（評価者）	3-a：教師 3-b：自分 3-c：仲間 3-d：学外者
4. いつ（時期）	4-a：学習前 4-b：学習中 4-c：学習後
5. どのように（方法）	5-a：客観テスト 5-b：論述試験 5-c：口頭試験
	5-d：レポート、プレゼンテーション 5-e：リフレクション

上記の表1 に基づいた評価方法（例）

例－1）教科や科目の知識の習得を評価する場合

- ・専門の知識が取得できているかどうかの確認 1-b：総括的評価
- ・個々の学生がどれだけ理解しているか 2-a：知識・技能
- ・教師が評価する 3-a：教師
- ・単元や学期の終了後に評価する 4-c：学習後
- ・客観式のテストで評価する 5-a：客観テスト

例－2）課外活動などを通してジェネリックスキルを評価する場合

- ・ジェネリックスキルを育成する 1-a：形成的評価

- ・活動の中で学生がどのように主体性を発揮し、
多様性を理解して他者と協働できたか 2-c: 主体性・多様性・協働性
- ・学生が自分自身、または仲間から 3-b: 自分 3-c: 仲間
- ・毎回の活動の最後に 4-b: 学習中
- ・ルーブリックを踏まえた、ふりかえりやフィードバック 5-e: リフレクション

3. 学習評価の構図

学習評価の方法は《直接評価か、間接評価か》、《量的評価か、質的評価か》という2つの軸を立てることで、その構図を描くことができる。

☆直接評価…学習者の知識や能力の表出を通して「何を知り、何ができるか」を学習者自身から提示させることで、学習のプロセスや成果を直接的に評価すること。

☆間接評価…学習者による学習についての自己報告を通じて、「どのように学習したか」、「何を知り、何ができているか」を学習者自身に答えさせることによって、学習のプロセスや成果を間接的に評価すること。

★量的評価…集団に対して実施することが容易で、統計分析にもかけやすいので、選抜・アカウンタビリティなどのために用いられる。何よりも測定・評価の客観性が重視される。

★質的評価…個々の学生の学習や指導の改善のための情報を得るのに適している。質的評価は必ず主観的要素を伴うので、測定・評価の信頼性の確保が重要になる。

4. 学習評価の4つのタイプ

図1で示したように学習評価はそれぞれ大きな2つの軸によって構成され、また、その領域は4つのタイプに分類することができる。今までは大学などにおいて、レポート、演奏やプレゼンテーションなどでそれが明示されたり、教員間や、教員と学生間で共有されたりすることは殆どなかった。しかし、アクティブ・ラーニングを進めるにあたって、どのような内容の評価が必要になるかを考えると、IVの領域に含まれる学習評価が最も重要であることがわかる。

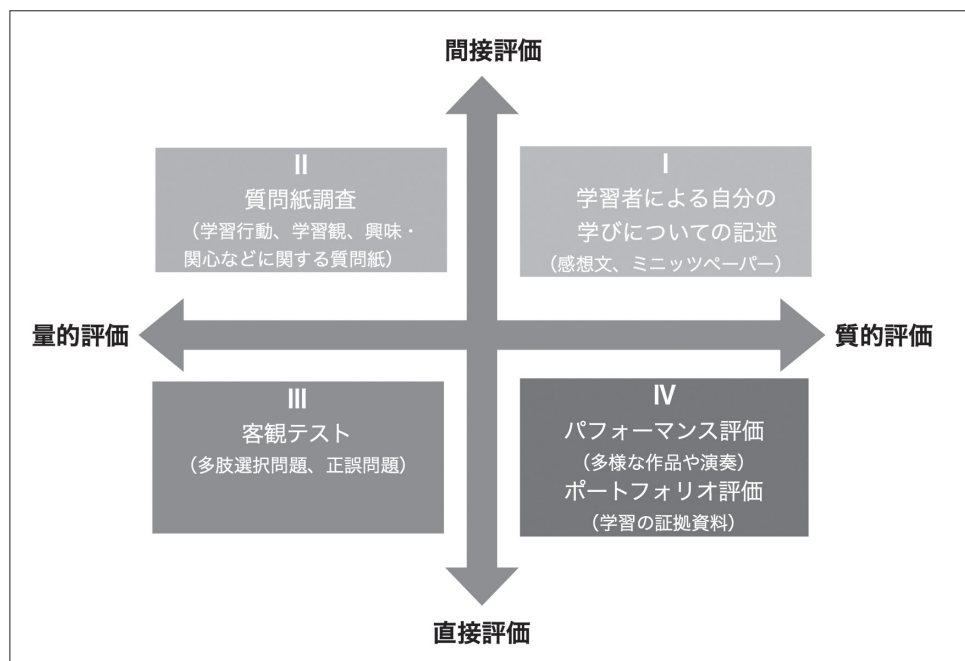


図1. 学習評価の4つのタイプ

【6】本大学における取組みの概要

平成24年度文部科学省「大学間連携協働教育推進授業」選定取組み「主体的な学びのための教学マネジメントシステムの構築」の一環として、本学では平成25年度よりルーブリックの開発が行われた。音楽学部では「音楽科教育演習」がその対象となり、平成25年度より平成29年度にいたる現在まで5年間にわたる《ルーブリックを活用したアクティブ・ラーニングへの試行》として研究開発を行っている。

「音楽科教育演習」の授業では、学生主体の授業や年間10回程度の学外活動を行い、模擬授業体験・マネジメント・演奏会プログラムの構成・練習計画とその実施などを課題とした。その上で、これらの活動を通して「能力」及び「積極性」を自覚できるシステムを研究し構築している。今年度は開発から5年を経過したのを機に、これまでの研究の検証をすることによって、より発展的なシステムの構築を目指している。

【7】環境

そもそも「音楽科教育演習」という科目は、「教育現場で即戦力となる音楽の技を身に付けたい。また、教育現場での知識を高めたい。」という学生の要望から生まれたサークル活動が発端となって開講されたもので、平成25年度以降の入学生を対象として開講され、今年度で5年目を迎える。

本年度の受講生は1年生9名、2年生8名、3年生6名、4年生0名、計23名である。従来に見られなかった特別な環境として4年生が0名であることである。これは、音楽教育専修の4年生が入学時から少ない上に、彼らが3年生の時には各団体（混声合唱団など）のリーダーなどを務めていたため、専攻（楽器）を第一義的に考えることから、本科目の受講生が減少したものと考えられる。

この講座の受講生の多くは将来教職を目指しているか、または教職に強く関心を持っている学生である。結果的に、音楽教育を専攻している学生が多いのは当然であるが、他の専攻からも受講可能にしているため、正規の授業時間内での共通な時間の確保・調整が難しい。そこで、正規の授業が終わった後の6時限（18：30～）に、集中講義というかたちで実施している。

さらに「音教リコーラス・アンサンブル」と称するサークル活動に参加することを履修条件とし、授業に引き続きそこにリンクしている。これは、楽器・備品の準備や片付けなどで、授業時間の90分では十分に完結できないためでもある。

注：音楽科教育法…〔1年Ⅰ／Ⅱ、2年Ⅲ／Ⅳ、3年Ⅴ／Ⅵ、4年Ⅶ／Ⅷで開講〕

【8】これまでの取組みで顕著になった2つの課題

1. 5年間の取組みの中で、「授業への積極性を能力評価にどのように反映するか」については、一番基本的な事項でありながら最も難しい課題となった。自己評価表に積極度を5段階（A～E）で評価する欄を設け、回答を求めるなど工夫を凝らしたが、評価基準を設けること自体が困難なため学生からの回答率が低く失敗に終わった。その原因として考えられるのは、以下の3点である。

- ①「積極性」は、その評価において出席率が大きく反映される性質のものであるが、自分が欠席した場合など、他者の様子が見えないことになるので判断しにくい。
- ②係別の活動などの様子が見えないので評価しにくい。
- ③対人関係の個人的感情が反映されるため、客観的な評価が難しい。

以上①～③の欠点を補うべく改訂を重ねた結果、《本科目のルーブリックは「能力」を対象とするが、その判定には「積極性」が含まれているものと判断する。》という結論に至った。

2. ルーブリックを活用したアクティブ・ラーニングの取組みは5年を経過したものの、やはり評価者としての1年生は、被評価者がすべて上級生であることや、活動期間が短いので、評価をすること自体難しいと感じているようである。これについては、年度当初に1年生対象

にこのシステムについて正しい認識と理解をさせる必要がある。

【9】 平成28年度 実践報告

1. 学習目標

初等科（小学校）から中等学校（中学校・高等学校）までの音楽教育の一貫性を高めるために、合唱及び器楽合奏の様々な演奏形態を体験的に学び、その過程での創意工夫により系統教育のあり方を研究する。また、共同作業による音楽の楽しさや感動体験を通して音楽科教師としての資質・能力を養う。

2. 授業内容（活動内容）

（1）授業の展開

次の（ア）～（エ）の内容について、A～Cを選択し、毎週状況をみて授業構成を考える。

（ア） 導入10分（全体集合）



図2. 小学校での演奏曲を決めるミーティング

- A. 出席確認
- B. 連絡事項
- C. 練習内容の確認

（イ） 展開－Ⅰ 40分（グループ単位）



図3. 楽器ごとに分かれて練習

- A. 打合せ
- B. 練習
- C. グループ・ミーティング

(ウ) 展開－Ⅱ 30分（全体集合）



- A. 全体練習
- B. グループ発表
- C. グループ組み合わせ練習

図4. 毎回、限られた時間での練習成果の発表（グループ発表）

(エ) まとめ 10分（全体集合）

- A. 伝達・報告（各係・グループ・リーダーなど）
- B. 連絡など（担当教員）
- C. まとめ（リーダー）

導入→展開Ⅰ→展開Ⅱ→まとめ について、各選択肢からの構成で展開する。

毎週、運営委員による準備会議（29年度は、木曜日2時限目前半）で決定し、授業を進めた。

《観察》リーダーは2年生であったが、前年度までの「活動のふりかえり」から学びとったことを反映させた活動が多く見られた。特に後期においては、準備会議に周到的な会議資料を用意するなど、運営委員としての責任と技量の高まりを感じることができた。

(2) 年間行事（研究発表等）表2. 参照

年度当初に予定していた10件の行事を全て実施することができた。

《観察》演奏会の内容はいずれも高い評価を受けるとともに、活動内容（教育的内容・地域貢献的内容）そのものに対する高い評価を得たことは、学生たちにとって大きな喜びとなったと同時に、何よりも将来の夢に向けての貴重な実践学習となった。



図5 大学祭での発表

表2. 平成28年度に実施した演奏会

- | | |
|-------------|----------------------|
| ・ 6月19日（日） | 総社市立中学校吹奏楽部教育交流会 |
| ・ 9月8日（木） | 倉敷市立船穂小学校フラワーコンサート |
| ・ 9月13日（火） | くらしき作陽大学付属認定子供園 音楽会 |
| ・ 9月15日（木） | 倉敷市立乙島小学校コンサート |
| ・ 10月16日（日） | 昭和中学地区母親委員会主催コンサート |
| ・ 10月23日（日） | キッズ・キャンパス出演 |
| ・ 11月20日（日） | 大学祭・音教リコーラス発表演奏会（図5） |
| ・ 12月10日（土） | こども大学ふくだ 依頼演奏 |
| ・ 1月13日（金） | 倉敷市立富田小学校コンサート |
| ・ 2月25日（土） | くらしき作陽大学付属認定子供園 音楽会 |

（3）授業運営（授業方法）

運営委員及び係を選出して、授業運営をリードした。毎時間、出席点呼などの教務内容を含め模擬授業の形態で行った。また、楽器係、楽譜係、編曲係、演出係、楽譜・備品管理係など、一人一役を原則として、全員が運営に積極的に参加できる機会を設けた。そして担当教員は、学生の授業に対する取組みを観察し、全体評価（感想）を終礼時に伝える。

《観察》一人ひとりが担う係の仕事は責任感を高め、メンバーの一員としての存在感に繋がっている。また、他者への協力性も強くなり、リーダーシップとメンバーシップが育まれている。また、28年度は責任感の強い学生が多く、確かな係活動が展開されたが、29年度にもその手法は確実に引き継がれており、そのことが活動全般にわたって波及してきていることを実感できる。組織を効率よく動かすための役割分担、その働き、係り間との関係の必要性や重要性など、多くのことを学習する機会となっている。

（4）事前準備

学生によって授業を運営・展開させるためには、十分な事前準備が必要であることから、毎週木曜日の2時限前半に、運営委員による定例の「事前準備会議」を設定した。そこでは、年間行事（研究発表など）に沿って毎時の授業プログラムを組む。教材選択（選曲）は、必要に応じて編曲するなど幅広い範囲から積極的に取り入れる。

《観察》運営委員会では、各行事のプログラム企画を主務とし、それに基づいた各題材を決定する。また、演奏会のプログラム企画には現場の教員との交渉が欠かせないため、結果的にマネジメント能力やコミュニケーション能力の伸長など、多くの能力の開発を助長することとなり、音楽的にも社会的にも貴重な経験となった。

（5）授業外での学修

「事前準備会議」を持つために、さらに各運営委員が係ごとに積極的にミーティングを開くことになる。また、小グループの各種アンサンブルなどの自主練習が行われる。それにより主体的な「授業外での学修」が行われることになる。

《観察》授業外では随時、学生食堂などで各種ミーティングが行なわれている。その様子は、まさにアクティブ・ラーニングである。



図6. 運営委員が時間を合わせて食堂に集まり打合せ

(6) ふりかえり

年度末までに表3（様式1）のコピーを返却し、自己評価と他者評価の差異の理由について考えさせた。

表3 1年生の自己評価と他者評価表の例

音楽科教育演習 評価表

様式 1.

学籍番号 (

)氏名

7 *個人名は全て整理番号に変換

評 価 項 目			自己評価				他者評価			
【 1 】 音楽科教師の教科指導に関する観点別評価			演 習 I / II	演 習 III / IV	演 習 V / VI	演 習 VII / VIII	演 習 I / II	演 習 III / IV	演 習 V / VI	演 習 VII / VIII
能力	到達目標	観点								
(1) 演奏 力 15	教科書のピアノ伴奏は、どの曲でも演奏ができ、リコーダー及びそれ以外の楽器（１つ以上）を演奏することができる。	１．ピアノ演奏	2				2.6			
		２．リコーダー	3				3.4			
		３．リコーダーや吹奏楽の楽器以外の楽器（１つ以上）	1				3.5			
(2) 歌唱 力 15	豊かな声量と表現で歌うことができ、「弾き歌い」の能力を備えている。また、知識が豊かで、分り易く説明することができる。	１．声量と表現	2				2.9			
		２．弾き歌い	2				2.6			
		３．知識	1				2.9			
(3) 音楽 理 解 力 15	音楽理論や音楽の歴史的背景に基づいた楽曲分析ができ、幅広く音楽を理解することができる。	１．音楽理論	3				3			
		２．歴史的・理解	1				2.7			
		３．楽曲分析	1				2.8			
(4) 読 譜 力 15	確かなソルフェージュ力で、楽譜の中に作曲者の意図を読み取ることができる。また、移調に関する知識や技術が高く、スコアリーディングができる。	１．ソルフェージュ力	2				3.4			
		２．意図・表現の分析	1				2.9			
		３．移調に関する知識と技術	1				2.9			
【 2 】 音楽科教師の部活動指導に関する観点別評価										
(1) 吹奏 楽 指 導 力 20	吹奏楽の楽器が演奏でき、編曲ができる。また、豊かな知識・情報で、分り易い吹奏楽の指導と指揮ができる。	１．吹奏楽の楽器演奏(1つ以上)	2				3.4			
		２．吹奏楽の編曲	1				2.4			
		３．知識・情報	1				3.4			
		４．指導・指揮	1				2.5			
(2) 合 唱 指 導 力 20	模範を示せる歌唱力があり、編曲ができる。また、豊かな知識・情報で、分り易い合唱の指導と指揮ができる。	１．歌唱力	1				2.9			
		２．合唱の編曲	1				2			
		３．知識・情報	1				2.6			
		４．指導・指揮	1				2.4			
		合計	29				57.2			
		平均	1.45				2.9			

※「観点別評価規準」（別表）により、5段階で評価

※他者評価欄は、【様式3】の判定欄を転記

(7) 評価方法

評価についてはアクティブ・ラーニングとして、能動的態度（積極性）に重点を置くことを基本に、可能な限り個々の評価に対して客観性を持たせると同時に、「評価すること」を体験できるシステムを構築した。

《観察》学生たちは「評価すること」の難しさを体験し、平素から「評価に関する視点」の捉え方がいかに大切であるかを学んだ。

(8) 課題発見型学習

教育現場を訪問することにより、児童・生徒の実態を体験的に学び、「現場の実態に柔軟に対応できる資質・能力とは何か」を学んだ。また、演奏会を企画・実施することから現場に即したプログラムの構成、教育現場における教師とのコミュニケーションの重要性などを

多面的、多角的に学ぶ。

《観察》教育現場での演奏を通して、音楽への興味度や傾向（年齢差によるものも含めて）を児童・生徒と接することによって多く学ぶものがあった。また、教育現場での課題や問題点の発見など、講義などの「教室」では学べないものが多いことを確認した。

【10】ルーブリックを活用した評価方法の実践

年度始めに「音楽科教育演習」の目標を説明し、ルーブリックとアクティブ・ラーニングについて理解を深めた。この科目の扱いとしてはセメスターであるが「通年の科目」と捉え、最終授業の3回前にアンケートを提出させた。そして最終授業時には自己評価と他者評価が比較できるよう、担当教師がデータを処理し、「ふりかえり」の資料として学生に提供した。

【11】ルーブリックを活用した客観的評価のシステム化

本科目の学習目標は「音楽科教師としての資質・能力を養う」ことである。その「能力」について観点別に分析し、客観的に評価するシステムを形成する。

1. 観点別評価基準（ルーブリック）

観点を「Ⅰ. 教科指導に関する観点」と「Ⅱ. 部活指導に関する観点」に大別し、前者を「演奏力」、「歌唱力」、「音楽理解力」、「読譜力」の4つの項目に分類。後者を「吹奏楽指導力」、「合唱指導力」の2つの項目に分類した。それをさらに「Ⅰ」の項目を3つの観点で、「Ⅱ」の項目を4つの観点で、それぞれ5段階で評価基準を設けた。各項目の「到達目標」は「現場の教師に求められる基本条件」と位置づけ、そこに至るまでの過程を5段階で評価するものである。

2. 各種評価表の記入方法とねらい

①表4（様式1.）参照 音楽科教育演習Ⅰ～Ⅳ 評価表

（記入方法）・自己評価欄に、観点別に自己評価を記入する。

（他者評価欄には、平均値を算出後に入力）

・評価が「1」より低い場合は「0」を記入する。

〈ねらい〉 自己評価と他者評価を比較し、その差異について考える。

* 下記の評価票は、2年時（演習Ⅲ／Ⅳ）の学生のデータ例である。1年時（演習Ⅰ／Ⅱ）の自己評価と他者評価（平均値）に大きな差異を生じているが、2年（演習Ⅲ／Ⅳ）になると相互の評価の差異が縮まっている。

* 様式1、2のデータは比較しやすいように、同じ学生（整理番号12）のデータを使用している。

表 4 演習Ⅲ/Ⅳの評価データ例

音楽科教育演習 評価表											
様式 1.			学籍番号 (		)氏名 12		*個人名は全て整理番号に変換				
評 価 項 目			自己評価				他者評価				
【1】音楽科教師の教科指導に関する観点別評価			演習 Ⅰ/Ⅱ	演習 Ⅲ/Ⅳ	演習 Ⅴ/Ⅵ	演習 Ⅶ/Ⅷ	演習 Ⅰ/Ⅱ	演習 Ⅲ/Ⅳ	演習 Ⅴ/Ⅵ	演習 Ⅶ/Ⅷ	
能力	到達目標	観点									
(1) 演奏力 15	教科書のピアノ伴奏は、どの曲でも演奏ができ、リコーダー及びそれ以外の楽器（1つ以上）を演奏することができる。	1. ピアノ演奏	4	4			4.4	3.9			
		2. リコーダー	3	3			3.7	3.5			
		3. リコーダーや吹奏楽の楽器以外の楽器（1つ以上）	2	3			3.4	3.1			
(2) 歌唱力 15	豊かな声量と表現で歌うことができ、「弾き歌い」の能力を備えている。また、知識が豊かで、分り易く説明することができる。	1. 声量と表現	1	2			2.9	3.2			
		2. 弾き歌い	3	4			2.8	3.4			
		3. 知識	2	2			3	2.7			
(3) 音楽理解力 15	音楽理論や音楽の歴史的背景に基づいた楽曲分析ができ、幅広く音楽を理解することができる。	1. 音楽理論	3	3			2.9	3.2			
		2. 歴史的理解	3	3			2.8	2.5			
		3. 楽曲分析	1	2			3	2.9			
(4) 読譜力 15	確かなソルフェージュ力で、楽譜の中に作曲者の意図を読み取ることができる。また、移調に関する知識や技術が高く、スコアリーダーイングができる。	1. ソルフェージュ力	2	2			3.3	3.2			
		2. 意図・表現の分析	2	3			2.8	2.8			
		3. 移調に関する知識と技術	1	3			2.8	2.9			
【2】音楽科教師の部活動指導に関する観点別評価											
(1) 吹奏楽指導力 20	吹奏楽の楽器が演奏でき、編曲ができる。また、豊かな知識・情報で、分り易い吹奏楽の指導と指揮ができる。	1. 吹奏楽の楽器演奏(1つ以上)	1	1			3.4	3			
		2. 吹奏楽の編曲	1	2			2.5	2.2			
		3. 知識・情報	2	3			2.9	2.6			
		4. 指導・指揮	1	2			2.6	2.1			
(2) 合唱指導力 20	模範を示せる歌唱力があり、編曲ができる。また、豊かな知識・情報で、分り易い合唱の指導と指揮ができる。	1. 歌唱力	2	2			2.9	2.7			
		2. 合唱の編曲	1	2			2.5	2.4			
		3. 知識・情報	1	2			2.9	2.7			
		4. 指導・指揮	1	2			2.7	2.4			
			合計	37	50			60.2	57.4		
			平均	1.9	2.5			3	2.9		

※「観点別評価規準」（別表）により、5段階で評価

※他者評価欄は、【様式3】の判定欄を転記

②表5（様式2.）参照

音楽科教育演習Ⅲ/Ⅳ 他者評価一覧表

（記入方法）・他者の評価を被評価者別に併記する。

- ・観点の項目（1. 2. 3. など）がすべて記入されていない能力別評価項目（1）演奏力、（2）歌唱力、（3）音楽理解力などが1つ以上ある場合、または評価の対象となった観点の項目が全体数の半数に満たない場合、その評価者の評価は全て無効とし、削除する。
- ・観点ごとに「点数の合計」と「評価者の合計人数」を記入する。
- ・評価者が5人以上ある場合はその平均点を記入する。（5人に満たない場合は空欄にする。）

〈ねらい〉 評価者による評価の平均値を求める。

表5 他者評価一覧表

「音楽科教育演習Ⅲ/Ⅳ」 他者評価一覧表															
様式 2.			被評価者（ 1 2 ）										*評価・被評価者ともに数字・記号に変換		
評 価 項 目			評 価 者 氏 名										合 計	人 数	平 均
			1	2	4	5	6	7	8	10	11	12			
			い	ろ	に	ほ	へ	ア	イ	オ	カ	ケ			
【1】教科指導に関する項															
能力	到達目標	観点													
(1)演奏力 15	教科書のピアノ伴奏は、どの曲でも演奏ができ、リコーダー及びそれ以外の楽器（1つ以上）を演奏することができる。	1	4	5	4	4	4	4	5	5	4	4	43	11	3.9
		2	4	3	4	3	4	5	4	4	4	3	38	11	3.5
		3	3	3	3	3	4	4	4	4	3	3	34	11	3.1
(2)歌唱力 15	豊かな声量と表現で歌うことができ、「弾き歌い」の能力を備えている。また、知識が豊かで、分り易く説明することができる。	1	4	3	4	2	4	4	4	3	4	3	35	11	3.2
		2	4	4	4	3	4	4	3	4	4	3	37	11	3.4
		3	3	1	3	2	4	4	3	4	3	3	30	11	2.7
(3)音楽理解力 15	音楽理論や音楽の歴史的背景に基づいた楽曲分析ができ、幅広く音楽を理解することができる。	1	4	4	4	3	4	3	3	4	3	4	36	11	3.2
		2	4	2	3	2	3	3	2	3	3	3	28	11	2.5
		3	3	2	4	3	3	4	3	4	3	3	32	11	2.9
(4)読譜力 15	確かなソルフェージュ力で、楽譜の中に作曲者の意図を読み取ることができる。また、移調に関する知識や技術が高く、スコアリーディングができる。	1	3	2	4	3	4	3	4	4	4	4	35	11	3.2
		2	3	3	3	2	4	3	3	3	4	3	31	11	2.8
		3	3	2	4	3	4	3	3	3	4	3	32	11	2.9
【2】部活動指導に関する項															
(1)吹奏楽指導力 20	吹奏楽の楽器が演奏でき、編曲ができる。また、豊かな知識・情報で、分り易い吹奏楽の指導と指揮ができる。	1	4	1	3	3	5	4	4	2	4	3	33	11	3
		2	3	1	2	2	3	4	3	2	3	1	24	11	2.2
		3	4	2	3	2	3	4	4	2	3	2	29	11	2.6
		4	3	1	2	2	3	3	2	2	3	2	23	11	2.1
(2)合唱指導力 20	模範を示せる歌唱力があり、編曲ができる。また、豊かな知識・情報で、分り易い合唱の指導と指揮ができる。	1	3	2	4	2	4	3	3	4	3	2	30	11	2.7
		2	2	1	3	2	4	4	2	3	3	2	26	11	2.4
		3	3	2	3	2	4	4	3	3	3	3	30	11	2.7
		4	3	1	2	2	4	3	3	3	3	2	26	11	2.4
Total			67	45	66	50	76	73	65	66	68	56	632	220	57.4
Average			3.4	2.3	3.3	2.5	3.8	3.7	3.3	3.3	3.4	2.8			2.9

③表6・7（様式3.）参照 音楽科教育演習 他者評価平均点一覧表（Ⅰ／Ⅱ、Ⅲ／Ⅳ、Ⅶ／Ⅷ）

（記入方法） 被評価者に対する評価者の評価を一覧表としてまとめる。

〈ねらい〉 被評価者への客観的評価を見ることができる。

表6 他者評価平均点一覧表（Ⅰ／Ⅱ）

様式 3. 「音楽科教育演習Ⅰ/Ⅱ」 他者評価表													
評 価 項 目			被評価者氏名(Ⅰ/Ⅱ)									合 計	平 均
			1	2	3	4	5	6	7	8	9		
【1】音楽科教師の教科指導に関する観点別評価			1	2	3	4	5	6	7	8	9		
能力	到達目標	観点											
(1)演奏力 15	教科書のピアノ伴奏は、どの曲でも演奏ができ、リコーダー及びそれ以外の楽器（1つ以上）を演奏することができる。	1. ピアノ演奏	3	4.2	4	2.6	3.5	2.7	2.6	1.8	2.2	26.6	3
		2. リコーダー	3.1	3.2	3	2.6	3.2	3.4	3.4	3.5	3.5	28.9	3
		3. リコーダーや吹奏楽の楽器以外の楽器（1つ以上）	3.4	3.4	3.3	2.8	3.2	3.5	3.5	3.4	3.2	29.7	3.3
(2)歌唱力 15	豊かな声量と表現で歌うことができ、「弾き歌い」の能力を備えている。また、知識が豊かで、分り易く説明することができる。	1. 声量と表現	3.8	3	3.1	2.5	2.6	2.9	2.9	3.7	3.2	27.7	3.1
		2. 弾き歌い	3.1	2.8	2.8	2.8	3	2.7	2.6	1.7	2.3	23.8	2.6
		3. 知識	3.6	2.9	2.8	2.4	2.5	2.7	2.9	3.5	3.4	26.7	3
(3)音楽理解力 15	音楽理論や音楽の歴史的背景に基づいた楽曲分析ができ、幅広く音楽を理解することができる。	1. 音楽理論	3.2	3.3	3.2	2.7	3.2	2.9	3	3.1	3.4	28	3.1
		2. 歴史的理解	3	2.9	2.9	2.5	2.9	2.6	2.7	2.9	3.2	25.6	2.8
		3. 楽曲分析	3.3	2.9	3	2.5	2.7	2.9	2.8	3.2	3.4	26.7	3
(4)読譜力 15	確かなソルフェージュ力で、楽譜の中に作曲者の意図を読み取ることができる。また、移調に関する知識や技術が高く、スコアリーディングができる。	1. ソルフェージュ力	4.4	3.4	3.5	2.5	3	3.3	3.4	3.5	3.4	30.4	3.4
		2. 意図・表現の分析	3.7	3	2.9	2.5	2.9	2.9	2.9	3.5	3.6	27.9	3.1
		3. 移調に関する知識と技術	2.7	2.6	2.3	2.1	2.6	2.5	2.9	3.1	3.1	23.9	2.7
【2】音楽科教師の部活動指導に関する観点別評価													
(1)吹奏楽指導力 20	吹奏楽の楽器が演奏でき、編曲ができる。また、豊かな知識・情報で、分り易い吹奏楽の指導と指揮ができる。	1. 吹奏楽の楽器演奏(1つ以上)	2.1	2.1	1.9	2.1	3.2	3.2	3.4	3.2	3.5	24.7	2.7
		2. 吹奏楽の編曲	2.2	2	2	1.7	2.2	2.3	2.4	2.7	3.1	20.6	2.3
		3. 知識・情報	2.1	2.1	2	2.3	3.1	3.3	3.4	3.7	4	26	2.9
		4. 指導・指揮	2	2	1.9	1.9	2.5	2.4	2.5	3	4	22.2	2.5
(2)合唱指導力 20	模範を示せる歌唱力があり、編曲ができる。また、豊かな知識・情報で、分り易い合唱の指導と指揮ができる。	1. 歌唱力	4.2	3.2	3	2.5	2.9	2.9	2.9	3.6	3.4	28.6	3.2
		2. 合唱の編曲	2.9	2.3	2.2	1.9	2.3	2.1	2	2.4	2.4	20.5	2.3
		3. 知識・情報	4.2	2.9	2.8	2.5	2.9	2.7	2.6	3.7	3	27.3	3
		4. 指導・指揮	3.9	2.6	2.6	2.1	2.6	2.5	2.4	3.6	2	24.3	2.7
Total			63.9	56.8	55.2	47.5	57	56.4	57.2	62.8	63.3	520.1	57.7
Average			3.2	2.9	2.8	2.4	2.9	2.8	2.9	3.2	3.3	26	2.9

※「観点別評価規準」（別表）により、5段階で評価

表7 他者評価平均点一覧表（Ⅲ/Ⅳ・Ⅶ/Ⅷ）

様式 3.			「音楽科教育演習Ⅲ/Ⅳ・Ⅶ/Ⅷ」 他者評価表															
評 価 項 目			被評価者氏名 (Ⅲ/Ⅳ)						合 計	平 均	被評価者氏名 (Ⅶ/Ⅷ)						合 計	平 均
			10	11	12	13	14	15			16	17	18	19	20	21		
			10	11	12	13	14	15			16L	17M	18N	19P	20Q	21U		
【1】音楽科教師の教科指導に関する観点別評価																		
能力	到達目標	観点																
(1)演奏力 15	教科書のピアノ伴奏は、どの曲でも演奏ができ、リコーダー及びそれ以外の楽器（1つ以上）を演奏することができる。	1. ピアノ演奏 2. リコーダー 3. リコーダーや吹奏楽の楽器以外の楽器（1つ以上）	2.8 3.2 3.2	3.7 3.5 3.4	3.9 3.5 3.1	3.2 3.2 3.5	2.9 4 3.3	2.8 3.2 3.4	19.3 20.6 19.9	3.2 3.4 3.3	4.7 3.5 3.7	4.5 3.6 3.9	4.8 4.2 3.9	4.3 3.6 3.6	4.9 3.8 4	3.9 3.8 4	27.1 22.5 23.1	4.5 4.5 3.9
(2)歌唱力 15	豊かな声量と表現で歌うことができ、「弾き歌い」の能力を備えている。また、知識が豊かで、分かり易く説明することができる。	1. 声量と表現 2. 弾き歌い 3. 知識	2.7 2.6 2.5	2.7 3.1 2.9	3.2 3.4 2.7	3.2 3.1 2.6	4.1 3.1 3.5	2.7 3 2.8	18.6 18.3 14.5	3.1 3.1 2.4	3.2 4.1 3.5	3.2 4 3.5	4.4 4.2 3.7	3.5 3.9 3.5	3.5 4.3 3.4	4.3 3.7 3.5	22.1 24.2 21.1	3.7 4 3.5
(3)音楽理解力 15	音楽理論や音楽の歴史的背景に基づいた楽曲分析ができ、幅広く音楽を理解することができる。	1. 音楽理論 2. 歴史的・理解 3. 楽曲分析	2.8 2.4 2.5	3.1 2.5 2.9	3.2 2.5 2.9	3 2.5 2.7	3.1 3 3.1	2.9 2.5 2.9	18.1 15.4 17	3 2.6 2.8	3.9 3 3.1	3.9 3.1 3.3	4 3.1 3.4	3.8 3.1 3.1	3.9 3.1 3.2	4.1 3.2 3.8	23.6 18.6 19.9	3.9 3.1 3.3
(4)読譜力 15	様々なソルフェージュ力、楽譜の中に作曲者の意図を読み取ることができる。また、移調に関する知識や技術が高く、スコアリーディングができる。	1. ソルフェージュ力 2. 意図・表現の分析 3. 移調に関する知識と技術	2.8 2.9 2.5	3.1 3 2.9	3.2 2.8 2.9	3 3 3	4.1 3.6 3.4	3.1 3.1 3	19.3 18.4 17.7	3.2 3.1 3	4.2 3.6 3.4	3.9 3.8 3.6	4.3 3.9 3.7	3.8 3.8 3.2	3.7 3.8 3.4	4.3 4 4.1	24.2 22.9 21.4	4 3.8 3.6
【2】音楽科教師の部活動指導に関する観点別評価																		
(1)吹奏楽指導力 20	吹奏楽の楽器が演奏でき、編曲ができる。また、豊かな知識・情報で、分かり易い吹奏楽の指導と指揮ができる。	1. 吹奏楽の楽器演奏(1つ以上) 2. 吹奏楽の編曲 3. 知識・情報 4. 指導・指揮	2.5 2 2.2 1.9	3.5 2.5 3.2 2.5	3 2.2 2.6 2.1	3.7 2.6 3.2 2.5	4.4 3.2 4 3.4	4.2 2.9 4 2.8	21.3 15.4 19.2 15.2	3.6 2.6 3.2 2.5	3.9 3 3.2 2.6	4 3.1 3.5 2.7	4 3.9 3.5 3.1	3.5 3.2 3.4 2.7	3.2 2.9 3.2 2.6	4.3 4.5 4.4 4.3	22.9 20.6 21.2 18	3.8 3.4 3.5 3
(2)合唱指導力 20	模範を示せる歌唱力があり、編曲ができる。また、豊かな知識・情報で、分かり易い合唱の指導と指揮ができる。	1. 歌唱力 2. 合唱の編曲 3. 知識・情報 4. 指導・指揮	2.5 2.4 2.8 2.4	2.5 2.6 2.8 2.7	2.7 2.4 2.7 2.1	2.7 2.8 2.6 3.5	3.8 2.7 3.7 2.4	2.4 2.4 2.7 2.4	16.6 15.3 17.3 15.5	2.8 2.6 2.9 2.6	3.1 2.8 3.1 2.8	3.1 2.9 3.3 3.1	4 3.2 3.6 3.5	3.4 2.9 3.4 3	3.4 3.1 3.3 3.1	3.7 3.2 3.3 3.4	20.7 18.1 20 18.9	3.5 3 3.3 3.2
Total			51.6	59.1	57.4	58.2	69.9	59.2	352.9	59	68.4	70	76.4	68.7	69.8	77.8	431.1	72.5
Average			2.6	3	2.9	2.9	3.5	3	17.6	3	3.4	3.5	3.8	3.4	3.5	3.9	21.6	3.6

※「観」別評価規準（別表）により、5段階で評価

【12】観点別評価基準表（平成28年度）

下記、表8の観点別評価表を指標とすることにより、自己・他者評価を客観的に評価することができる。

表8 音楽科教師の教科指導に関する観点別評価

能力	到達目標	観点	5	4	3	2	1
演奏力 (15点)	教科書のピアノ伴奏は、どの曲でも演奏ができ、リコーダー及びそれ以外の楽器(1つ以上)を演奏することができる。	1. ピアノ演奏	教科書の伴奏は、どの曲も演奏できる。	教科書の伴奏は、ほとんどの曲が演奏できる。	教科書の伴奏で、難易度が中程度の曲は演奏できる。	教科書の伴奏で、平易な曲は演奏できる。	平易な曲は、和音付け程度の伴奏ができる。
		2. リコーダー	難易度の高い曲が演奏できる。	やや難易度の高い曲が演奏できる。	教科書程度の曲が演奏できる。	平易な曲は演奏できる。	基礎練習曲程度は、演奏できる。
		3. リコーダーや吹奏楽の楽器以外の楽器(1つ以上)	2018.1.22 教科書の伴奏は、どの曲も演奏できる。	やや難易度の高い曲が演奏できる。	平易な曲は、演奏できる。	基礎練習曲程度は演奏することができる。	スケール程度は、演奏することができる。
歌唱力 (15点)	豊かな声量と表現で歌うことができ、「弾き歌い」の能力を備えている。また、知識が豊かで、分り易く指導することができる。	1. 声量と表現	豊かな声量と表現で、魅力的に歌うことができる。	豊かな声量と表現で、歌うことができる。	豊かな表現で、歌うことができる。	表現の基礎力を示すことができる。	表現についての知識をもっている。
		2. 弾き歌い	教科書の曲は、どれも歌唱指導しながら弾き歌いができる。	歌唱共通教材程度の曲は、弾き歌いができる。	教科書教材のうち、平易な曲は弾き歌いができる。	平易な曲は弾き歌いができる。	平易な曲に和音付けして、弾き歌いができる。
		3. 知識	知識が豊かで、分り易く指導することができる。	知識が豊かで、分り易く説明することができる。	歌唱についての知識が豊かである。	歌唱についての知識をもっている。	歌唱についての興味をもっている。
音楽理解力 (15点)	音楽理論や音楽の歴史的背景に基づいた楽曲分析ができ、幅広い音楽を理解することができる。	1. 音楽理論	音楽理論を習熟している。	音楽理論の知識が豊かである。	音楽理論の知識をもっている。	音楽理論の基礎知識を理解している。	音楽理論に興味をもっている。
		2. 歴史的経緯	歴史的経緯に関わる豊かな知識をもっている。	歴史的経緯に関わる知識をもっている。	歴史的経緯について、高い関心をもっている。	歴史的経緯について、関心をもっている。	歴史的経緯について、ある程度の関心がある。
		3. 楽曲分析	楽曲分析により、総合的に音楽を理解することができる。	難易度の高い曲の楽曲分析ができる。	やや難易度の高い曲の楽曲分析ができる。	平易な曲の楽曲分析ができる。	楽曲分析のための、基礎能力を備えている。
読譜力 (15点)	確かなソルフェージュ力であり、楽譜の中に作曲者の意図を読み取ることができる。また、移調に関する知識や技術が高く、スコアリーディングができる。	1. ソルフェージュ力	極めて難易度の高い曲を、正しい音程とリズムで歌うことができる。	難易度の高い曲を、正しい音程とリズムで歌うことができる。	やや難易度の高い曲を、正しい音程とリズムで歌うことができる。	平易な曲は、正しい音程とリズムで歌うことができる。	基礎的な練習曲は、正しい音程とリズムで歌うことができる。
		2. 意図・表現の分析	楽譜の中に作曲者の意図を読み取ることができる。	楽譜の中に自らの意図を表現することができる。	楽譜による意図表現の大切さを理解することができる。	楽譜による表情・表現について、考えることができる。	楽譜による表情・表現について関心をもっている。
		3. 移調に関する知識と技術	移調に関する知識が豊かで、簡易的な移調演奏ができる。スコアリーディングができる。	移調に関する知識が豊かで、移調演奏ができる。	移調に関する知識が豊かで、移調演奏ができる。	移調に関する知識が豊かである。	移調に関心をもっている。

能力	到達目標	観点	5	4	3	2	1
吹奏楽指導力 (20点)	吹奏楽の楽器が演奏でき、編曲ができる。また、豊かな知識・実践及び情報で、分り易い吹奏楽の指導と指導ができる。	1. 吹奏楽の楽器演奏(1つ以上)	知識的に移調して、模範演奏することができる。	楽曲のフレーズを模範演奏することができる。	難易度の高い曲を演奏することができる。	やや難易度の高い曲を演奏することができる。	平易な曲は演奏することができる。
		2. 吹奏楽の編曲	フル編成の吹奏楽の編曲ができる。	アンサンブルの編曲ができる。	四声体のトランスクリプション(楽譜付け)ができる。	吹奏楽編曲の基礎理論知識をもっている。	吹奏楽編曲に関心がある。
		3. 情報の授受	吹奏楽活動について幅広く豊かな情報をもと、積極的に授受することができる。	吹奏楽活動について、幅広い情報をもちいる。	吹奏楽活動について、情報をもっている。	吹奏楽活動の内容を把握している。	吹奏楽活動の内容に関心がある。
		4. 指導・指揮	吹奏楽の総合的な知識に基づき、分り易い指導・指揮ができる。	吹奏楽の総合的な知識に基づき、分り易い指導・指揮ができる。	吹奏楽の指導ができる。	吹奏楽指導の基礎知識をもっている。	吹奏楽指導に関心がある。
合唱指導力 (20点)	模範を示せる歌唱力があり、編曲ができる。また、豊かな知識・実践及び情報で、分り易い合唱の指導と指導ができる。	1. 歌唱力	いかなる形態においても模範を示すことができる。	独唱・重唱で、模範を示すことができる。	独唱・重唱が好きで、人前で歌うことができる。	歌うことが好きで、人前で歌うことができる。	歌うことが好きである。
		2. 合唱の編曲	様々な編成の合唱の編曲ができる。	ボーカルアンサンブルの編曲ができる。	四声体のトランスクリプションができる。	合唱編曲の基礎理論知識をもっている。	合唱編曲に関心がある。
		3. 情報の授受	合唱活動について幅広く豊かな情報をもと、積極的に授受することができる。	合唱活動について、幅広い情報を授受することができる。	合唱活動について、情報をもっている。	合唱活動の内容を把握している。	合唱活動の内容に関心がある。
		4. 指導・指揮	合唱の総合的な知識に基づき、分り易い指導・指揮ができる。	合唱の総合的な知識に基づき、分り易い指導・指揮ができる。	合唱の指導ができる。	合唱指導の基礎知識をもっている。	合唱指導に関心がある。

【13】自己評価と他者評価の分析 図7 参照

(1) 概ね自己評価に比べて他者評価の方が高い傾向がみられる。(1年)

理由：自己に対しては評価が厳しい。(自信のなさも多少ある)

自己評価が他者の目に留まることを意識して、少し抑え気味に評価している。

上級生は、前年度の他者評価が影響して自己評価は抑え気味である。

(2) 学年が進むごとに自己評価が高くなっている。(2年)

理由：授業への取り組みを通して自信を持てるようになってきている。

実際に技能が高まっていることを自分で実感できる。

(3) 学年が進むごとに他者評価も高くなっている。(4年)

理由：自分への自信が他者の目にも同じように映る。

実際に技能が高まっていることを自分で実感できる。

(4) 自己評価と他者評価の差が著しい学生

理由：自分に自信が持てないが、他者はその学生を認めている。(Ex.出席率が極めて高いなど、何かの積極的要素を他者が評価したものと考えられる。)

(5) 自己評価より他者評価が低い学生

理由：自分に自信を持っているが、諸事情で出席率が悪いなど、能力外の評価が含まれると考えられる。

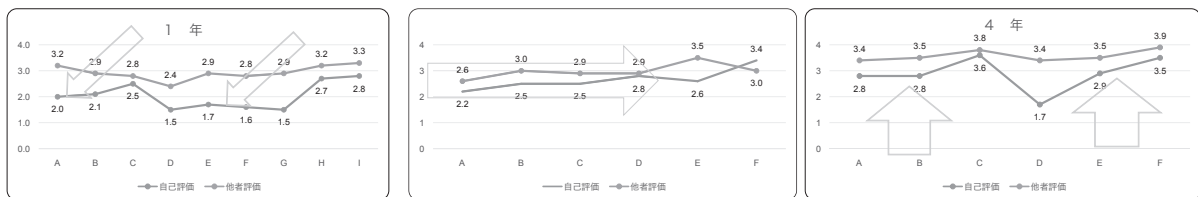


図7 自己評価と他者評価の差異

【14】 社会で活躍するために必要と考える能力要素

図8のデータは平成21年度就職支援体制調査事業（経済産業省）の中から、学生と企業との意識のギャップが顕著に現れている資料で、様々な論文などでも頻繁に使われているものである。

このデータの「企業」を「教育現場・学校」に置き換えても共通点が多く、現在取り組んでいるアクティブ・ラーニングの将来あるべき姿とも重ね合わせながら分析し、役立てる資料としたい。

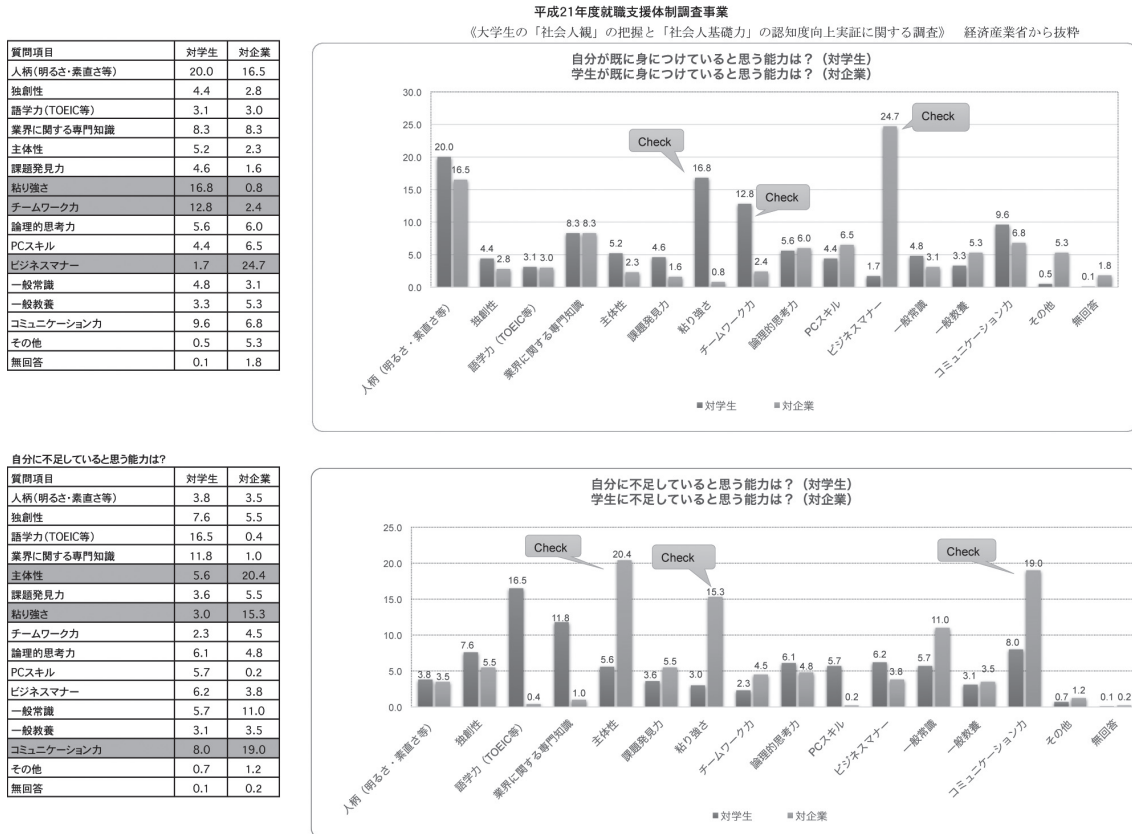


図8 学生と企業との能力意識のギャップ

また、図9・10に示したように、企業が「学生に求める能力要素」と、学生が「企業で求められていると考える能力要素」に大きな差異が見られる。

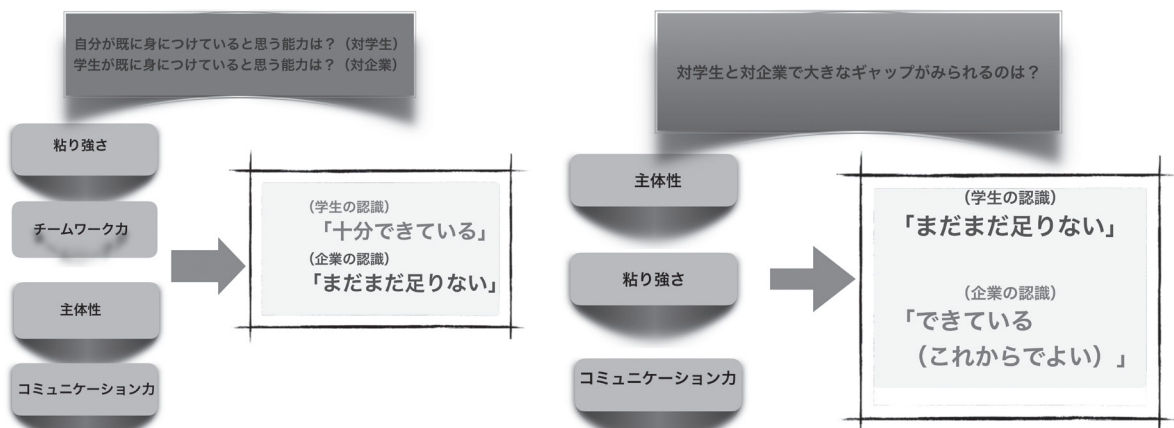


図9 「身につけていると思う能力」での意識の差 図10 学生と企業間で大きな意識の差異が見られるもの

企業が学生に対し「主体性」・「粘り強さ」・「コミュニケーション能力」といった「社会人基礎力」に類する内面的な基本能力の不足を感じている一方、学生はそれらの能力要素への意識は低く「自分

は既に身につけている」と考える傾向が見られる。

- ・ 学生は「語学力」・「業界に関する専門知識」・「PCスキル」などの不足感を感じている一方、企業側はそれらの能力要素に対し特に不足感を感じていない。つまり、企業側が「学生に求める能力要素」と、学生が「企業から求められていると考えている能力要素」ならびにその水準には大きなギャップが存在する。
- ・ 企業・学生ともに、3つの社会人基礎力「前に踏み出す力、考え抜く力、チームで働く力」の中では「前に踏み出す力」を重視し、「社会人基礎力」の12の要素の中では、企業・学生ともに「実行力」を最も重視している。同時に、「主体性」への回答も多いことから、社会で活躍するのは「自ら進んで実行できる人間」であるとの意識が強いと考えられる。一方、外国人留学生は「創造力」「実行力」を重視する意識が高いことが見られることから、グローバルな視点からの能力を育成することも大切である。

【15】 総括

2016年12月、中教審は2020年度から小中高校において順次全面实施する次期学習指導要領の改定案を文部科学相に答申した。その答申内容は『「何ができるようになるか」「どのように学ぶか」などの視点で指導要領を見直すべきだと指摘。育成する力の明示や、児童生徒が主体的に授業に参加する「アクティブ・ラーニング」の全教科での導入を決めた。』というものであり、全面实施については、小学校が20年度、中学校が21年度、高校は22年度の新入生から学年ごとに順次実施するとされている。

本学では、平成24年度文部科学省「大学間連携共同教育推進事業」選定取組み「主体的な学びのための教学マネジメントシステムの構築」の一環として、平成25年度より本年度に至るまで「ループリックを活用したアクティブ・ラーニングへの試行」として、「音楽科教育演習」の実践と開発を行っているが、このプログラムこそ次期指導要領に対応できる教員養成プログラムと言える。

アクティブ・ラーニングは、学ぼうとする目標とその段階を明示すること（ループリック）を基本とする。それを活用した客観的な自己評価及び他者（第三者）評価がアクティブな行動を促すのである。

人は常に自己評価と他者評価に基づいて行動している。そして、自己評価は他者評価の影響を受けている。

つまり「私のことは私なりにこう思っているが、他人は私のことをどう思っているのだろうか。」という意識が日常の行動を支配しているのである。それ故に、授業における他者評価は自己の行動に大きく影響する。実際に、自己評価と他者評価（平均点）が比較できる個人別評価表（様式1）では、上級学年になるほどその影響が顕著に現れている。

このように、アクティブ・ラーニングには「ふりかえり」のプログラムが重要となる。「ふりかえり」には2通りの答えがある。1つは「私は自分のことをこの程度だと思っていたが、他人は意外と高く評価してくれているのだ。」という答え。もう1つは「私はこのことに関わり自信を持っているが、他人は意外と評価してくれていないのだ。」という答えである。前者によって行動がより積極的になった者や、後者によって行動が謙虚になった者など多くの具体の事例が見られる。

いずれにしても学年が上がるごとに自己評価が上がり、それに伴って他者評価も上がっていることは興味深いことである。

最後に、もう一度このプログラムの原点である「評価する」という行動を考えてみよう。

教育現場では「成績評価」「人物評価」など、毎日の生活が評価の連続と言っても過言ではない。例えば、日常の生活指導において、「この子はどんな生徒ですか」との質問に答えなければいけない。保護者の性格も知っておかなければ対応に困ることがある。全て「人を見る眼」である。このようなことを訓練し、常に研ぎ澄ました気持ちを持つことは、教員養成課程で大きな意味を持っている。

そのためには、自らが積極的に行動しないと「人を見る眼」は生まれない。すなわち、他者評価はできないのであり、このことを理解してこそアクティブ・ラーニングが形成される。

一方、学習する上でアクティブ・ラーニングの欠かせない要素に「興味」がある。興味があること（興味を持たせること）、好きなことを素地として「何をどのように学ぶか・学ばせるか」に取り組むべきである。

本学で行っている「音楽科教育演習」では、教育現場でのコンサートを企画・運営し、そこに求められる「何を、どのような演奏形態で表現するか」という課題に履修学生全員で取組み、その成果が着実に「将来の教職への期待と自信」へと繋がってきており、アクティブ・ラーニングへの取組みが目に見えるかたちで結実してきていることが検証できた。

引用・参考文献

- ・松下佳代：『アクティブ・ラーニングの評価』東信堂 2016. 3 P.3-22
- ・成田秀夫：『アクティブ・ラーニングをどう始めるか』東信堂 2016. 3 P.117-124
- ・平山勉：『本物のアクティブ・ラーニングへの布石 授業を創る・学校を創る』
黎明書房 2016. 1 P.6-16
- ・文部科学省（2012）『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて
～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～』 中央教育審議会答申

